

〔研究ノート〕

平成25年度総合演習Ⅰ（ディベート）の授業報告

－社会人基礎力の向上の観点から－

Research Note

The Report on “Basic Seminar I (Debate)” (2013)

- Improvement in Fundamental Competencies for Working Persons -

中村学園大学 流通科学部

音 成 陽 子・野 中 昭 彦・福 沢 健

1. 総合演習Ⅰとは

現在、社会の様々な場面において「思考力」が求められている。「思考力」とは、問題を発見し、その問題に関する情報を的確に収集・分析し、論理的思考を通して、問題の解決を行う能力である。本授業は、キャリアを形成するのに必要となる思考力を、ディベート演習を通して育成することを目的に実施した。

1) 到達目標

到達目標は以下の6項目とした。

1. 必要な資料や情報を収集できる
2. 上記の資料や情報を分析できる
3. 収集した情報を基に論理的で説得力のある文章を構成できる
4. 取り上げたテーマに関して分かりやすく発表できる
5. 質問に対して、適切な回答ができる
6. 他グループの発表内容を理解し、質問できる

2) 流通科学に関する知識の応用力の育成と三角ロジックの学習

この授業では、流通科学部の学生が現在学習している流通に関わる科目の受講を通して得た知識を現実の流通場面に应用すること、上記到達目標（3）に関わる論理的思考力の獲得

を目指している。論理的思考力の獲得のために、力を入れているのが「三角ロジック」の学習である。三角ロジックは、「事実」「論拠」「主張」の3つから構成されている。三角ロジックの獲得は、論理的な文章の作成、論理的な意見の表明、説明、説得に不可欠なものである。

2. 平成24年度との相違点と次年度への課題

1) 企業の選択

平成24年度は衣料品（ユニクロ、しまむら）、飲食業（サイゼリヤ、餃子の王将）、医薬品（大塚製薬、武田薬品）、カフェ（ドトールコーヒー、スターバックスコーヒー）とした。いずれも学生が日常生活で目に触れることができる商品やサービスを提供できる企業であった。しかし、業界の再編や業務提携、業務内容の変化が大きい企業があり、学生は資料をまとめ上げることに苦慮したといえる。

平成25年度は日常生活で目に触れることができる企業に加え、流通科学部の学生が就職を希望する業界とした。そこで、ネット通販（Amazon、楽天市場）、スーパー・コンビニ（イオン、セブン&アイHD）、家具・インテリア（IKEA、ニトリHD）、運輸（ヤマト運輸、日本通運）とした。

しかしながら、今回、企業情報を非公開とす

る企業があった。様々な資料から情報を収集することはできたものの、詳細な内容や企業戦略などに偏りのある情報であったかもしれない。2年生が前学期だけで企業研究するには、難しい点があったのではないだろうか。

次年度は、企業情報の公開状況も企業を選択するうえで考慮する必要がある。企業研究には、財務に関する内容や企業ドメインなども入れることが望ましい。

2) ワークブックの作成

平成23年度・平成24年度と経て、学生への配布資料に目途がついたことから、本年度はワークブックを作成した。学生はN-Leapsと併用して、手元資料を参考に作業を進めることができたようである。ワークブックは教員が提示する資料の管理や確認に有効であり、N-Leapsは臨機応変な資料の提供や学生との課題のやり取りに有効であった。両方の利点をうまく使い、欠点を補い合う活用ができたのではないだろうか。ただし、さらに内容の精選と充実を図ったうえで、次年度のワークブック作成の必要がある。

3) 授業内容の変更点

論理的な文章の作成、論理的な意見については「三角ロジック」という明確な内容があった。プレゼンテーションや討論についてはパワーポイントの作成と質疑応答を扱うだけで、より充実する内容にする必要があった。

そこで、本年度は4回目の授業において「プレゼンテーションを学ぶ」のタイトルで、パブリックスピーキングについての講義を行い、その後、クラス内発表会を行った。さらに、討論について、10回目の授業において「討論を学ぶ」というタイトルで、クリティカルシンキングに基づく質疑応答について講義を行い、その後、クラス代表を選ぶクラス討論会を行った。これらのことより、全体討論会では昨年よりも活発

な質疑応答が行われ、質問や意見も説明を求めるだけでなく、論理的な矛盾を指摘することもみられた。

4) 資料の収集

PCや図書館を活用しての文献の検索は、これまで同様に実施した。昨年度は学外文献依頼が2件だけであった。今年度は予算計上や図書館利用の確認により、約10件の利用があった。ただし、同一学生による複数の依頼もあった。今回、取寄せた文献は論文や専門誌の記事であることから、今後は資料収集の方法を学ぶことも考慮して、各グループに1件以上の学外文献依頼を実施してみるという課題を提示してもいいのではないだろうか。

5) グループ編成

これまで本授業の開講年である2年生は、必修科目も多く、クラスごとに時間割が決められていることを考慮してグループ編成を行っていた。しかしながら、他学年の受講や一部にクラス混在のグループができることは否めなかった。そこで、本年度は、すべてのグループにクラスを振り分けてみた。

N-Leapsの活用や、メール、時間の調整などをやり繰りしている様子がうかがえた。作業効率を上げるために役割分担を明確にし、次のグループ活動までに決めた作業を行って来るといってもできていたようである。さらに、他のグループに仲間がいるということで、情報交換や資料の共有など、活動の幅が広がっていたようである。したがって、次年度もクラスを横断的にグループ編成することが望ましいだろう。

3. 社会人基礎力の向上の検討

1) 目的

本授業の学生への効果測定として、授業の目的にもある社会人基礎力を取り上げた。授業前と授業後の変化をみることで、実際に教員が期

待した社会人基礎力を向上させることができているのかを明らかにすることを検討した。

2) 対象者

平成25年度総合演習（ディベート）を受講した学生は78名である。そのうち、授業開始時、および、授業終了時の両方に回答を得ることができた68名（87.2%）を対象とした。対象となった学生は全員2年生の日本人学生であり、男子学生7名、女子学生61名だった。学生は第1回授業と第15回授業で自己評価を行った。

3) 方法

経済産業省編『社会人基礎力 育成の手引き』に記載されている東海大学がキャリア設計科目において使用している社会人基礎力評価票の項目を用いて、自己評価シートを表1のように作成した。この評価シートは本授業がアクティブラーニングであることから、学生が「何をできるようになったか」で設定がなされている。つまり、社会人基礎力の12要素について、具体的な内容で到達レベルが設定されている。そこで、レベルを1点として換算した。統計処理は対応のあるt検定（有意水準： $p < 0.05$ ）で行った。

社会人基礎力について平野（2010）は、性差、学年差はないという結果を得ており、本稿において性別での統計処理は行わなかった。

注) アクティブラーニング（谷口ら、2011）

「能動的な学習」のことで、授業者が一方的な知識伝達をする講義スタイルではなく、課題研究やPBL（Project/Problem Based Learning）、ディスカッション、プレゼンテーションなど精英の能動的な学習を取り込んだ授業の総称。

4) 結果と考察

図1および表2は授業前後の学生の自己評価である。授業前後で12項目すべてに向上がみら

れた。なかでも、授業前後で最も高い変化をみせたのは柔軟性であった。次いで、課題発見力、発信力の順だった。授業前に高い点数だった規律性およびストレスコントロール力は、授業後にプラスの向上をみせたものの、前後変化に有意な差はみられなかった。他の10要素はいずれも、授業前に比べ授業後では、有意な差がみられた。これらのことから、本授業の受講により学生は、本授業の目的や目標を理解し、向上させたと考えられる。さらに、グループ活動を通じて社会人基礎力の3つの力の1つである「チームで働く力」の必要性を意識したことがうかがえる。

本授業の目的である思考力は、楠見ら（2011）が述べるクリティカルシンキングに相当するといえる。その構成要素は（1）情報の明確化、（2）情報の分析、（3）推論、（4）行動決定からなり、図2のような構造となっている。これらは、社会人基礎力の「前に踏み出す力」や「考え抜く力」ともいえよう。

楠見ら（2011）は、他者に対する配慮や、他の立場の尊重が優先される日本文化に適合した社会的クリティカルシンキングの必要性を示唆している。社会的クリティカルシンキングについて楠見ら（2011）を引用する。「自分とは異なる他者の存在を意識し、人間の多様性を認めながら、偏ることなく他者を理解しようとし、文脈や状況によっては譲歩することができる。そして、異なる他者と多様な価値観に対する寛容さをもつことを重視した社会的クリティカルシンキングが必要となる。」このような社会的クリティカルシンキングを身につけるためには、他者と一緒に体験的に学び、共感・楽しみながらのクリティカルシンキング行う機会が必要だともいっている。

表1 社会人基礎力の自己評価シート

質問1 主体性	質問2 働きかけ力	質問3 実行力	質問4 課題発見力
①自分が何ができるかを把握していない。	①他者に関わりあわず、課題に対する関心も不十分である。	①計画を実行に移すことができない。	①自分がどんな疑問や興味関心をもって いるのか、どんなことに取り組みたいのかわからない。
②自分のできることや能力を自覚できている。	②課題に取り組もうとするが、他者との協働が十分にできていない。	②計画を事項に移すことはできるが、目標達成するところまで継続することができない。	②いくつかの問題点や疑問点を選択肢として与えられれば、その中から取り組んでみたいものを選ぶことができる。
③与えられた課題や決められた役割の範囲の中で、自分にできることや能力を活かすことができる。	③他者と協働して課題に取り組もうとする。	③計画を実行・継続し、特に問題がなければ目標達成に至ることができる。しかし、途中で困難を感じると、すぐに投げ出してしまふ。	③自分が今取り組んでいる課題の中から、問題点や疑問点を探し出すことができる。
④自分にできることや能力を活かせるような役割や課題を、自発的に探し出すことができる。	④他者に協力することの必要性を伝えることができる。	④実行途中で困難や失敗が生じても、投げ出さずに努力を継続できる。	④自分が今取り組んでいる課題にとどまらず、自発的に新しい物事に目をむけて興味関心の幅を広げ、新たな問題点や疑問点を探し出すことができる。
⑤自分の役割に意義を見出し、他者のため、グループのために貢献できる。	⑤周囲の人を動かして目標を達成するパワーを持っている。	⑤実行途中で困難や失敗が生じても、向上のチャンスとして前向きにとらえて、今後に活かすことができる。	⑤自分自身が意義や価値を見出し、意欲的に取り組めるような問題点や疑問点を見つけすることができる。
質問5 計画力	質問6 創造力	質問7 発信力	質問8 傾聴力
①無計画に物事を進めようとする。	①問題に対してアイデアを出すことができない。	①自分の意見が明確になっておらず、何を伝えていいかわからない。	①相手の意見に耳を傾けようという努力をしない。
②他から与えられた計画を受身的に消化する。	②問題に対して、いくつかのアイデアを出すことができるが、他からの引き出しの範囲を抜け出せない。	②自分の意見は明確になっているが、他者に伝えることを控えてしまうことが多い。相手がよく耳を傾けてくれたり、適切な問いかけをしてくれる場合には、自分の意見を伝えることができる。	②相手の意見に耳を傾け、自分の視点から解釈することができる。
③作業に優先順位をつけて、実現性の高い計画を立てられる。	③自分の日常的な考え方や視点に基づいて問題を検討したり、自分らしいアイデアを出すことができる。	③自発的に相手に自分の意見を伝えることができる。しかし、具体性や論理性が不足している。	③相手の意見に耳を傾け、相手の視点に立って物事を考えることができる。
④常に計画と進捗状況の違いに留意している。	④ひとつのアイデアをさらに膨らませたり、発展させたりすることができる。	④具体的な例や根拠をあげながら、自分の意見を論理的に伝えられる。	④相手の意見に耳を傾け、その意見内容ばかりでなく、その背後にある価値観や心情も理解できる。
⑤進捗状況や不測の事態に合わせて、柔軟に計画を修正できる。	⑤複数のアイデアを統合したり、組み合わせたりすることによって、さらに独創的なアイデアを数多く生み出すことができる。	⑤相手の理解度を確認しながら、それに合わせて柔軟に表現を調整し、自分の意見や気持ち・感情を明確に伝えられる。	⑤適切に問いかけたり、対話したりすることを通じて、相手から新しい気づきや着想を引き出すことができる。
質問9 柔軟性	質問10 状況把握力	質問11 規律性	質問12 ストレスコントロール力
①初対面の相手に対して、自分から声をかけることができない。	①自分がどのような状況におかれているのか把握できない。	①規律を乱すような言動、行動をとる。	①ストレスを回避することができず、現状から逃避しようとする。
②自己の主張にこだわり、他者の意見を聞こうとしない。	②自分の位置は把握できても、チーム全体に創造力が十分に及ばない。	②規律を受動的にとらえ従うことはできるが、その意義を認識していない。	②ストレスを発散しようとするあまり他者に迷惑をかけた時、チームの規律を乱す。
③自分と他者の意見の共通点や相違点を見つけられる。	③チームの現状を明確に把握し、自分のやるべきことが理解できている。	③規律の意義を認識し自らの行動を律していくことができる。	③ストレスについて、他者に相談することができる。
④自分の意見を主張するばかりでなく、相手の意見を尊重しながら説得できる。	④客観的なデータなど元にチームの現状を把握、分析できる。	④規律の意義を認識し、チームにおけるその保持に努めようとする。	④ストレスの原因を把握し、その解消に努めることができる。
⑤自分とは異なった価値観を持つ他者とともに、共有できる理念や目標を見つけ出し、協力し合うことができる。	⑤客観的な視点に基づいて現状を把握し、未来を予測できる。	⑤状況に応じた的確に規律を運用することができる。	⑤ストレスを未然に防ぐよう努力し、ポジティブに物事をとらえようとする。

注) 経済産業省編、「社会人基礎力 育成の手引き - 日本の将来を託す若者を育てるために -」、pp426-427より作成

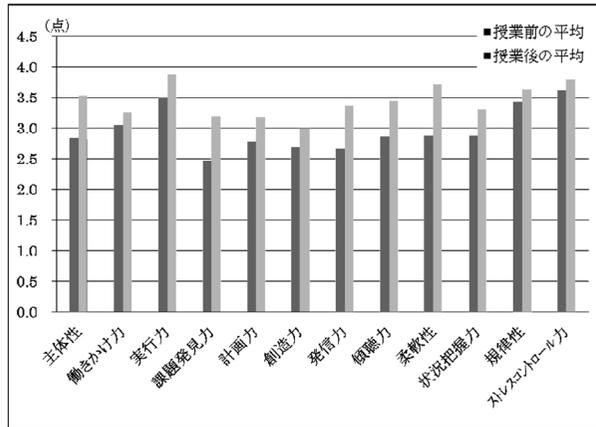


図1 社会人基礎力の授業前後の平均値

表2 社会人基礎力の授業前後の変化

		授業前の平均	授業後の平均	差の平均	標準誤差	t値	p値(両側)
前に踏み出す力	主体性	2.84	3.53	0.69	0.15	4.70	**
	働きかけ力	3.06	3.26	0.21	0.09	2.35	*
	実行力	3.50	3.88	0.38	0.12	3.18	**
考え抜く力	課題発見力	2.47	3.21	0.74	0.13	5.80	**
	計画力	2.78	3.19	0.41	0.13	3.22	**
	創造力	2.71	3.00	0.29	0.11	2.60	*
チームで働く力	発信力	2.66	3.37	0.71	0.13	5.32	**
	傾聴力	2.87	3.44	0.57	0.12	4.89	**
	柔軟性	2.88	3.72	0.84	0.13	6.44	**
	状況把握力	2.88	3.31	0.43	0.08	5.20	**
	規律性	3.43	3.63	0.21	0.11	1.94	ns
	ストレスコントロール力	3.62	3.79	0.18	0.14	1.30	ns

* : p<0.05 ** : p<0.01 ns : 非有意

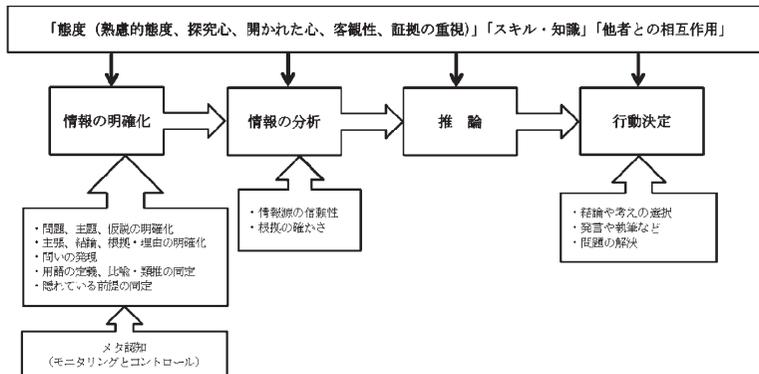


図2 クリティカルシンキングの構成

注) 楠見孝ら (2011)、『批判的思考力を育む 学士力と社会人基礎力の基盤形成』をもとに作成

4. まとめ

平成25年度総合演習Ⅰは日常生活で目に触れることができる企業に加え、流通科学部の学生が就職を希望する業界を対象に企業研究、プレゼンテーション、討論を行った。ワークブックの作成やパブリックスピーキングなど、新しい試みも学生の活動の一助となったようである。

社会人基礎力の自己評価は授業前後で12項目すべてに向上がみられ、授業前後で最も高い変化をみせたのは柔軟性であった。授業前後の差が小さかった働きかけ力や創造力、規律性、ストレスコントロール力の4要素は、本授業の今後の課題といえる。グループや個人にとどまらない周囲を巻き込むような活動、ブレインストーミングなどアイデアを発揮する機会などを授業に盛り込む必要があるだろう。しかしながら、すべての活動を半期15回の授業で行うには、内容の詰め込みすぎるといふ懸念がある。したがって、次年度に向けて内容の精選を検討したい。

5. 文献

- 平野眞 (2010), 社会人基礎力尺度の作成と授業効果測定, 東海大学課程資格教育センター論集 (9), pp.25-35.
- 河合塾編著 (2013), 『「深い学び」につながる

アクティブラーニング 全国大学の学科調査報告とカリキュラム設計の課題』, 東信堂

経済産業省編 (2010), 『社会人基礎力 育成の手引き - 日本の将来を託す若者を育てるために -』, 朝日新聞出版

楠見孝・子安増生ほか (2011), 『批判的思考力を育む 学士力と社会人基礎力の基盤形成』, 有斐閣

谷口哲也・友野伸一郎 (2011), 河合塾編著, 『河合塾からの「大学のアクティブラーニング」調査報告 - 4年間を通じた学習者中心のアクティブラーニングについて -』, 『アクティブラーニングでなぜ学生が成長するのか 経済系・工学系の全国大学調査からみえてきたこと』, 東信堂, pp.5-92.

吉田咲子 (2012), 社会人基礎力演習における学内 SNS の活用, 京都光華女子大学研究紀要50, pp.139-152.

【謝辞】

総合演習 (ディベート) の実施にあたって、多くの先生方にお忙しい時間を割いて助言していただいたり、学生へご指導いただいたりと様々なご協力を賜りました。お礼申し上げます。